

## 選評

苫名 悠

### 承安本「後三年合戦絵巻」の絵師明実と制作環境について

本論文は、現在東京国立博物館に三巻本として所蔵される「後三年合戦絵巻」貞和本の画面分析を通じて、その原本であると目されるいまは現存しない承安元年（一一七一）作の先行作例、承安本を復元的に想定し、その絵の作者および制作の背景について考察を試みるものである。

貞和本は付属する序文の記述から貞和三年（一三四七）の制作と見られており、この主題の現存本として最古の作例となっているが、その絵には南北朝期らしい描法にまじって、十二世紀後半から十三世紀初めにかけての絵巻にみられる表現が諸処に見出されることがかねて指摘されており、これは貞和本が原本とした承安本の反映であると考えられてきた。本論文もまたこれを踏まえて論じられるものであるが、ここでは貞和本の中に古様の要素、すなわち承安本の面影を見出すというより、貞和本を通して遡源的に承安本を見つめるという、新たな方向性が加わっている。

筆者は貞和本の画面を仔細に眺めながら、そこにどのようなかたちで十二世紀の表現があらわれているのかを指摘していく。まず、人物の顔貌に見られる似絵の描法として、「後鳥羽天皇像」「隨身庭騎絵巻」との近似を指摘し、ついで紫から落ちる人物の姿態に関して「聖徳太子絵伝」との共通性を見出す。人物の手首の内側や足の甲の腱の描写などには「病草紙」の表現をあげて近接をたしかめ、それが「伴大納言絵巻」には見られないものであることを述べる。これらはいずれも人体をあらわす際に描き手が癖のように持つ描き方や、先行の図に倣うポイントのような部分であり、その近似の指摘は、根拠とする比較例の数としては少ないものの、具体的かつ明確であり説得力をもつ。筆者はまた、貞和本に見られる切腹の場で腸が露出する様子や女性に対する暴力の表現などをとり上げ、「地獄草紙」や九相図との比較から、場面選択における感覚の共通性にも着目している。

こうした表現の検討を踏まえて本論文では、承安本の作者とされる明実について、「伴大納言絵巻」の作者とも目される常盤光長とは異なる作風を持つ作家であり、後白河院の周辺で企画された仏教絵画の制作にも関わった絵師の一人なのではないかとの推論を提示し、その明実が工房の絵師とともに携わり、似絵を専らとする絵師との協働のもとに完成したのが「後三年合戦絵巻」承安本であるとする。

論文において最も評価された点は、現在存在しない作例について視覚的に論じる手法であり、実際にはそれは最も問題が指摘された点でもあった。たしかにそこには大きな困難があるが、同時に美術史の可能性、そして必要性が秘められてもいる。本論文における果敢な試みは、「後三年合戦絵巻」の研究、ひいては絵巻物史の研究に一つの提示をおこなうものであり、画面表現を真摯に追う姿勢と考察の努力は大変評価されるものであると思われる。

以上の理由により、苫名悠氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称えるものとする。